



ここは肉の牢。むせ返るような淫気が充満し  
麻子の体は否応無しに発情させられていた。

「うう…動けない…」

「麻子、今日はこの触手から精を絞り出して空にしろ」

「そんなの無理ですよお…」

「できなきゃここから出られないぞ」

「酷いです…」

ふーっ  
ふーっ

グッ  
グッ

グッ  
グッ

ギョッ  
ニョッ

男に強いられ、麻子は腰を振り始める  
「はあ……んぎいい……太いい……あああつ！」  
「偉いぞ麻子、その調子だ」  
「は、はいいい……んああつ」

うあつ♡  
ああ……♡

ビクッ

ビクッ

ニクッ  
ホクッ

ボクッ  
ニクッ



無意識に自分の感じる部分へ触手をあてがう麻子。

「んんっ…あっ…ああああ…!!」

「良い腰使いだ。ここで男共を喜ばせる練習をしておけ」

「そんな…んっんああああ…あっあっあっ…」

ビズッ

おおお…♡  
ボジッ  
ボジッ  
ボジッ

ニチエ

麻子に深く突き刺さる触手が精を吐き出す。  
同時に麻子も最初の絶頂を迎えた。

「んぐうううう…！」

「まず一発目だな。あと十数回くらいで空になるだろう」

「そ、そんなにですか…？」

「それくらいはできないと練習にならないからな」

「勝手なこと…ばっかり…んはああ…」

「ほら次だよ次」

ズ  
ツ  
ク  
ク

ズ  
ツ  
ク  
ク

ビ  
ュ  
グ  
グ  
ル  
ク

ぐ  
ぐ  
ぐ  
ぐ  
♡



再び麻子が腰を動かす。触手の淫液が蜜壺に塗り込められていく。その度に麻子の感度は少しずつ増していく。

「はあ…はあ…ううあああ！ああっ！」

「感じ始めて来たな麻子」

「わ、私は、んああ…あなたにっ…んぐう…言われて…」

「そのまま続けろ」

「は、いい…」

ビクビクッ

ズンズン  
ズンズン

ズン



はーっ  
はーっ

歯を食いしばって必死に快楽に耐える。

「うう…早く…終わってえ…うああ…」

「触手も麻子の腰使いを喜んでるみたいだぞ」

「そんなの…うぎいい…うれ、しくないいい…!」

ビクッ

んんんん…♡

んんん

ボボボ  
ビュビュ

んん

触手が二度目の痙攣を起こす。大量の淫液が注がれる。  
あまりの精の勢いで腰が浮きそうになる。

「あああああああ——！！！」

「その調子なら大丈夫だな、暫くしたらまた見に来るよ」

「そんな……こんな場所に独りだなんて……うう……」

「じゃあね」

触手の精が空になるまで、麻子はここから出られない。

ゴダッ

ン

ビュッ  
ブルッ  
ブルッ

ああっ♡  
ああっ♡



16時間後

麻子は幾度も絶頂を迎え、虫の息になっていた。

「は……は……う、ああ……あ……」

「おー、ちゃんと触手を満足させられたようだな」

「うう……ぐすつ……ぐすつ……」

「これなら男共も満足させられそうだな」

「……………」

牢の中にも外にも希望など無い。

ビクッ

ビクッ

ビュルツ  
ビュツ

